

福島海辺

出下遼平 … 東京で俳優をしている男
吉武卓 … 記憶を失くした男
宮里高嗣 … 津波で亡くなった男
三島大助 … 津波で亡くなった男の友人
宮里久美子 … 津波で亡くなった男とともに亡くなった母親
宮里加奈 … 津波で亡くなった男とともに亡くなった妻
星野あみ … 高校の時に観に行った演劇に出演していた女優
山下みきこ … 高校の時に観に行った演劇に出演していた女優
森山絹代 … 母親の同級生
岩永早苗 … 母親の同級生

男子高生 1
男子高生 2
給仕
カメラマン

(劇中劇)

ピアニストの銅像 (出下が演じる役)

○久美子の高校時代

久美子、教室で日記を書いている。
後から森山が目隠しする。

岩永「だーれだ」
久美子「え、誰？」

久美子、森山の手に自分の手を重ね合わせる。

久美子「うすべったい」

岩永「ふふ」

久美子「あ、早苗だ」

森山、手を離す。

久美子「絹ちゃんか」

森山、笑う。

森山「私の手、うすべったい？」

と、手を見せる。

久美子「うん」

森山「ねえ、それより、ちょっと、こっち来て」

森山、久美子の手をとって、連れていく。

久美子「え、ちょっと、日記」

森山「ん？」

久美子「まだ書きかけなんだけど」

森山「いいよ、早く。行こ」

久美子「ねえ、ちょっと、」

三人、校舎の裏側にたどり着く。

森山、ポケットから煙草を取り出す。

マッチを擦って、煙草を吸い始める。

久美子「絹ちゃん」

岩永も、煙草をもらい、スパスパと。

久美子「早苗も」

岩永「ふふ」

森山「久美子もやりなよ」

久美子「タバコは、嫌よ」

森山「久美子って、つまんなーい」

岩永「ほんと、優等生」

二人、うまそうに煙を吐く。

久美子「だって」

岩永「久美子ってやっぱ子供ね」

久美子「うるさい」

先生の声がする「おい、そこで吸ってるやつ、誰だ」

森山「逃げよ」

森山、岩永、煙草をその場に捨てて、去る。煙草の火を足で消していたため、少し出遅れた、久美子。

久美子「もう」

○久美子の高校時代——体育館裏

森山、体育館の裏にある倉庫に隠れている。

そこへ、久美子が走ってやってくる。

森山「(小声で) 久美子」

久美子「え」

森山「(小声で) 久美子」

森山「こっちこっち」

久美子、ようやく倉庫の壁に錆であいた穴から森山の目があることに気づく。

倉庫の重たい鉄の扉を開けて、中へ入り、ゆっくりと閉める。

久美子「真っ暗」

森山「静かに」

久美子「(小声で) びっくりしたあ」

森山「(小声で) うん」

久美子「(小声で) ちょっと冷んやり」

森山「うん」

森山「(小声で) こっち来るかな？」

久美子「(小声で) どうかな」

しばらくしても、追っ手が来ないので、

森山「先公、諦めたかな」

久美子「早苗は？」

森山「二手に別れたから」

久美子「はは」

森山「攪乱作戦」

久美子「早苗が捕まってないといいけど」

森山「帰りに海辺で、待ち合わせようって」

久美子「うん」

久美子、走って熱くなってるので、鉄の壁に寄りかかり、

久美子「気持ちいい」

森山「ん？」

久美子「壁」

久美子「冷たくって」

森山「ふふ」

しばらく、黙っている二人。

森山「核シェルターとか、こんな感じかな」

久美子「どうかな、もっと快適なんじゃない」

と、森山、久美子の手に触れる。

久美子「え」

森山「ふふ」

森山「びっくりした？」

久美子「…」

森山「驚かせて、ごめん」

森山「あのね、私、どうやら、久美子のこと、好きみたい」

久美子「え？」

と、手を引っ込める、久美子。

森山「なんか、ずっと言えなかったんだけど」

森山「もやもやしてて」

久美子「…うん」

森山「さっき目隠ししたでしょう」

久美子「うん」

森山「その時、やっぱりどきどきしちゃって。この気持ち、久美子に伝えとこーかなーって
思ってた」

森山「ねえ」

森山「どう思った？」

久美子「どうって、そんな」

森山「ふふ」

久美子「あー、もう暑い」

久美子「絹ちゃんって、ほんと、意地悪なんだから」

森山「へへ」

久美子「しかも、なんで、急に、そうやって」

森山「そう？」

久美子「そうよ、ゴーインよ」

森山「怒ってる？」

久美子「なんだか分からないけど、ちょっと」

森山「そういうところが可愛いな」

久美子「ばっかじゃない！」

森山「ははは」

久美子「笑い事じゃないよ、笑い事じゃないんだからね」

森山「ははは」

○雪が降り積もるなか——劇場の前

ある上演（チェーホフの『かもめ』）が終演し、観客の波が玄関口から押し寄せてくる。観客は、学校行事で連れてこられていた高校生たちとその保護者、教師などである。口々に「すごかったねえ」「スペクタクル！」「名演技だった」「あの女優は…」「アルカージナが…」「お上手！」などと言っている。中には、ハンカチで涙を拭いているものも。男子高校生は一目散に駆け回り、雪で遊んでいる。男子高校生の母親同士が立ち話をしている。しばらくして「じゃあね」「またね」と口々に言ったり、息子に対して早く帰るよう急かしたりして、別れる。

宮里久美子「(高嗣に) 早く帰るのよー」

宮里、手をあげて、応えるが、遊びをつづける。

男子高校生たちは、まだ帰らないで、劇場の前の広場に降り積もった雪で雪合戦をしている。

立ち話をしていた人溜まりは、徐々に消えて、閑散とし、残るは雪合戦の男子高校生たちだけとなる。

宮里に追っかけられ、吉武、劇場の裏へと逃げていく。

吉武、しばらくして、戻ってきて「おーい」と皆を呼ぶ。

出下、宮里、三島たちが吉武の方へと向かう。出下、隠し持っていた雪玉を振り上げる。

吉武「(顔を防ぐように手をあげて) やめて」

宮里「(大声で) ハハ」

と、三島が宮里の顔に雪玉をぶつける。

宮里「おい！」

皆、どっと笑う。

吉武「ほら」

出下「さっき出てた人たちじゃない？」

三島「ほんとだ」

吉武の指差した先には、人影がある。

その人影は、俳優たちのレッスンする姿である。

ダンスしたり、柔軟をしたりする姿が、カーテン越しに見える。

男子高校生たちは頬を紅潮させ「おー」

やがて、微かに発声練習や歌声が聞こえてくる。

各々、声に耳を澄ましたり、窓に近づいたりする。

吉武、雪玉を転がして、少し大きな雪玉を作る。そして、少し離れたところに立ち、小さな雪玉をたくさん作る。

吉武「みんな」

皆が集まってくる。

出下「どうしたんだよ」

吉武、足で雪に線を引く。

吉武「ここからあの雪玉に向かって投げるんだ」

三島「どういうことだよ」

吉武「この雪玉を投げて、あの雪玉から一番遠かったやつが、あそこに行くんだ」

男子高生1「ようし」

と、投げる。結構、近くに「おお」など。

男子高生2「俺の番だ」

と、投げる。少し遠のき「はは」など。

出下「よしきた」

男子高校生たち「イデ、イデ、イデ、イデ」と連呼し、囃し立てる。

出下、投げる。一番近くに。沸く。

吉武、宮里を指さす。

宮里「ふふ」

笑いながら投げ、あきらかに大きく通り越していく。

宮里「あー」と嘆声をあげ、皆どっと笑う。

三島「じゃあ」

と、投げ、まずまずの結果。

三島「最後だ」と、雪玉を渡す。

吉武「よし」

吉武、投げようとしてはやめるのを繰り返して、間をためにためる。聴衆から「武ちゃん、早く投げろよ」。吉武「まあまあ」。

吉武、静かになったところで、投げる。

吉武の雪玉も、大きく通り越し、宮里の雪玉に近づいていく。

しかし、わずかに宮里の方が遠い。

宮里、「あー」と再び嘆く。皆、どっと笑う。

宮里「でも」

と、転がっていった雪玉の方に行く。

皆もついていく。現場につくと、

男子高生1「勝ってる、勝ってる」

男子高生2「ほんとだ」

吉武「はっきりしたろ」

宮里「え、でも」

と、雪玉を手を持って動かそうとする。

吉武「だめだぞ」

宮里「はは、ばれたか」

吉武「行ってこいよ」

宮里「わー」

と叫び、なぜか雪玉を拾って、上に投げつける。

宮里「はめられた」

吉武「あそこにいる人に、みんなで楽屋にいったいいか、聞いてこいよ」

出下「早く行ってこいよ」

宮里「えー」

吉武「ほら」

宮里「え、どうやって」

三島「ほら、あそこ（と遠くを指し）、ドアあるよ」

吉武「ほら」

宮里「もう」

天を見上げるようにして、とぼとぼ劇場に入っていく宮里。

男子高生1「あいてるの？」

宮里、劇場の楽屋口の扉を開けて、中へ。

出下「あ、入ってった」

皆、笑う。

男子高生2「がんばれよー」

三島「ザトー」

出下「ほら、雪だるま、作るぞ」

出下、小さな雪玉を転がして、徐々に大きくしていく。

ある程度、大きくなったら、男子高校生1、吉武が加勢する。

三島「じゃあ、こっちは頭」
と、同じように雪玉を大きくしていく。
男子高校生2が加勢する。

吉武「こっちも」
一人が出下、吉武の雪だるまの方を手助けする。

雪玉は、彼らの身長をはるかに超え、大きくなっていく。
三人でも動かなくなったので、

出下「おーい」
と、三島たちに呼びかける。

二人は自分たちの雪玉を置いて、向かう。
5人で雪玉を転がす。やがて5人でも動かなくなる。

三島「どうやって、頭を置くの？」
出下「うーん」

吉武、雪だるまの頭部分を持ち上げようとして
吉武「おもー」

5人がかりで、持ち上げて、上に乗っける。
「おー」と歓声が上がる。

皆、疲れて座りこんだり、寝そべったりする。

三島だけが立って、まわりに枝が落ちていないか探す。
雪だるまの手にしようとして枝をあててみるが、小さいので捨てる。
やがて木のそばに行き、ジャンプして枝を折ろうとする。
何度か試みたのち、枝を捕まえる。と同時に、枝が折れて、三島は倒れる。
枝に積もった雪が舞い、また、皆が笑う。三島、手で粉雪を払う。

三島は折れた枝を持ってきて、程よい大きさに折って、雪だるまの左右の胴体に刺す。

三島「ほら」

男子高校生が近寄ってきて

男子高生1「手？」

三島「うん」

男子高生1、三島のマフラーを取って、雪だるまの首に巻きつける。

男子高生1「ハハ」

三島「ザト、遅いね」

男子高生1「うん」

男子高生2、やってきて男子高生1に「帰ろう」

男子高生1「うん」

男子高生1、2「じゃあ、帰るわ」

三島「じゃあね」

二人、離れたところに置いていたカバンを持ち、帰っていく。

出下「バイバーイ」

二人「じゃあね」

吉武「じゃあなー」

三島「また明日」

二人、去っていく。

しばらくして、休んでいる三人。

出下「ちょっと、あったかいもの、買ってくるわ」

吉武「じゃあ、俺も」

三島「うん」

出下、吉武、出かけていく。

取り残される三島。

戻ってくる二人、温かい飲み物を持っている。

出下「寒いな」

三島「うん」

吉武「ザト、まだかな」

出下「遅いよな」

遠くに男子高校生と女子高校生のカップルが通っていくのを見つけ、

出下「あれ、戸谷じゃない？」

三島「あ、うん」

吉武「ほんとだ、戸谷だ」

出下「女といるぜ」

吉武「ほんとだ」

出下「おい、戸谷ー」

カップル、こそこそと去っていく。

吉武「戸谷、逃げるなよー」

出下「戸谷、彼女いるんだ」

三島「うん」

吉武、舌打ちする。

吉武「いいなあ」

出下「遅くない？」

三島「見てこようか」

吉武「いいよ、来るって」

三島、二人の飲み物を見て、

三島「あったかそうだね」

吉武、これ見よがしに「ああ」と温かい息を吐く。
出下も「ああ」と続く。

三島「どうしようかな、俺も買ってこようかな」
出下「そこの裏に自販機あったよ」
三島「そう」

三島、おもむろに立ち上がり、自販機の方をうかがう。
三島「あ」
出下「ん？」
三島「帰ってきた」

宮里、長い距離を走って、戻って来る。

吉武「遅いじゃないか」
宮里「ごめん」
吉武「で、なんて？」
宮里「だめだって」

出下「こんなに待たせて」
宮里「ごめん」

宮里「でも、後から来るって」
三島「え？」
宮里「すぐ」

宮里「稽古場には入れないけど、かわりに来てくれるって」
吉武「嘘だろ」
宮里「ほんとだって」
出下「すげえ」
三島「ザト、すごい」

宮里「雪だるま…」

三島「そう。暇だったから、作ったんだ」

三島「どうしようかな、自販機」

宮里「え？」

遠くから、女優が二人、やって来る。稽古着の上に暖かそうなコートを着ている。

宮里「来た」

男子高校生たち、じっと二人の姿を見つめている。

二人、近づきながら、

あみ「ほんとだ、いるよ」

みきこ「うん」

みきこ、雪に足を捕まえられて、

みきこ「きゃあ」

あみ「もー、みきこー、気をつけてよー」

みきこ「冷たーい」

どきどきする高校生たち。

女優二人が、男子高校生たちの輪に入り、

あみ「こんにちはー」

高校生たち「こんにちは」

みきこ「緊張してる？」

あみ「みきこ、からかわないの」

みきこ「だって可愛いから」

あみ「ほら」

みきこ「アハハ」

あみ「今日は、観に来てくれて、ありがとう」

みきこ「ありがとうございます」

吉武「(あみに) あの、女優の」

あみ「そう」

みきこ「私もよ」

吉武「いや、えっと、女優役の」

あみ「そうそう、ニーナ役の星野あみです」

出下「めっちゃ、よかったです」

あみ「ありがとう」

三島「(みきこに) えっと、何役でしたっけ」

みきこ「私は、小間使い」

三島「小間使い？」

みきこ「ちょっとだけ出てたの」

三島「あー」

みきこ「この人は主役」

あみ「でも、別の日はダブルキャストで、みきこがニーナ役なのよ」

吉武「ダブルキャストって何ですか？」

あみ「一つの役を二人でやるの」

吉武「へえ」

三島「ああ、そういうことか、別の日で」

みきこ「そうそう」

あみ「入れ替わるの、私たち」

みきこ「寒くない？」

三島「いや、寒くないです」

あみ「宮里くんも、ずっと鼻水」

宮里「いや、もう大丈夫です」

吉武「あの、なんかやってくれませんか？」

三島「なんかって何をだよ」

吉武「いや、今日の場面とか」

みきこ「あー」

三島「お前、図々しいよな」

吉武「いいだろ」

鼻をすする、宮里。

みきこ「じゃあさ」

と、あみの耳元で打ち合わせをし

あみ「(笑いながら) うん、うん、わかった」

みきこ「じゃあ、いくね」

みきこ「そらこれが、さっきお話した品ですよ…… (戸棚から鴈の剥製をとり出す) あなたのご注文で」

あみ「(鴈を眺めながら) 覚えがない! (小首をかしげて) 覚えがないなあ!」

みきこ「シャムラーエフとトリゴーリンの台詞よ」

宮里「ああ」

宮里、鼻をすする。

吉武「あの若い女優さんのやつは」

みきこ「わかった」

みきこ「人も、ライオンも、鷲も、雷鳥も、角を生やした鹿も、鷲鳥も、蜘蛛も、」

あみ「水に棲む無言の魚も、海に棲むヒトデも、人の眼に見えなかった微生物も、」

あみ・みきこ「-----つまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環(めぐり)をおえて、消え失せた。……もう、何千世紀というもの、地球は一つとして生き物を乗せず、あの哀れな月だけが、むなしく灯火(あかり)を灯している。今は牧場(まきば)に、寝ざめの鶴の啼く音(ね)も絶えた。菩提樹の林に、こがね虫の音ずれもない」

男子高校生たち「おお」

みきこ、ハットを取るようなマイムをして、お辞儀をする。

吉武「あの、サインもらってもいいですか？」

出下「あ、俺も」

あみ、みきこ、二人のノートや筆箱にサインをする。

吉武「あざーす」

出下「あざす」

あみ「(腕時計を見て) そろそろ戻らないと」

みきこ「じゃあね」

男子高校生たち「さようなら」

あみ「風邪ひかないようにねー」

みきこ「バイバーイ」

男子高校生たち、会釈のような礼をする。

二人、帰っていく。みきこ、また足を取られて「きゃー」。

二人、振り返る。あみ、さりげなく手を振り、みきこ、飛び上がりながら手を大きく振っている。

宮里「さよーならー」

みきこ「バイバーイ」

二人、見えなくなる。

吉武、宮里、こづく。

宮里「(鼻、すすり) なんだよ」

三島「すごいよ、ザト」

出下「めっちゃ、きれいだったなあ」

吉武「(サインを触りながら) いやあ、やっぱ女優だなあ」

出下「(サインを見比べながら) こっちの方が、いいよ」

吉武「いや、こっちの方がいいよ」

出下「いやいや、こっちの方がいいよ」

宮里「俺、そろそろ帰ろうかな」

三島「うん」

宮里「(みんなに) じゃあ、俺、帰るわ」

吉武「え、もう帰るの」

宮里「うん、親に怒られるから」

宮里、カバンをとって、帰っていく。

宮里「じゃあねー」

三島「じゃあね」

吉武「じゃあなー」

出下「バイバーイ」

三島「帰っちゃったね、ザト」

吉武「ラーメン、食って帰ろうぜ」

出下「いいな」

三島「ごめん、俺ももう帰らなきゃ」

出下「大ちゃん、付き合い悪いな」

三島「ごめん、ごめん」

吉武「いいよ、いいよ。じゃあ、二人で行こうぜ」

出下「うん」

吉武「早く行こうぜ」

出下「おう」

吉武「じゃあ」

出下「じゃあなー」

三島「じゃあね」

三島、一人、残る。しばらくして、とぼとぼと帰っていく。
道すがら、くしゃみを何度も繰り返す三島。

○披露宴の会場----宮里の結婚式

結婚式のテーブルには、出下、吉武、三島が着席している。めいめいフォークやナイフを使い、食事をとっている。

三島「鴨？」

吉武「ん」

三島「鴨肉だな」

吉武「ああ」

出下「うんまい」

吉武「うめえな」

また、黙々と鴨肉にがつつく三人。
やがて、一人食べ終え、一人食べ終えする。

口の周りをナプキンで拭き、ワインを手にとって

吉武「やっぱ赤に限るな」

三島「吉武、くわしいの？ワイン」

吉武「いんや」

出下「こいつは、ただのうんちく風情だよ」

三島「なんだよ、うんちく風情って」

吉武「(ワイン飲み干し) うめー」

三島「ワイン？」

吉武「うん」

三島「(給仕に) あ、すみません」

給仕、やってくる。

吉武「お前は？」

三島「俺、ビール。イデは？」

出下「まだ、あるから、大丈夫」

給仕「ワインは赤でよろしかったですか？」

吉武「えーと、じゃ、次は白で」

給仕「かしこまりました。それと、ビールでよろしかったですか？」

三島「はい」

給仕、注文のあった白ワインとビールを取りに行く。

三島「でも、ちょっと量がね」

出下「腹一杯」

吉武「俺も」

給仕、戻ってきて、白ワインとビールをそれぞれグラスに注ぐ。

三島「(給仕に) ありがとうございます」

出下「おい、そろそろ、来るぞ」

新郎新婦、やって来る。その後ろに新郎の母親がついている。

皆、一斉に立ち上がる。

宮里「みんな、今日は、ありがとう」

三人、口々に「おめでとう」

加奈「今日は、ありがとうございます」

三人、口々に「おめでとうございます」

三島「ばたばたしてるね」

宮里「うん、今日ばかりは」

三島「そうだよな」

宮里「あんまり喋れなくて」

三島「うん」

吉武「馴れ初めは？」

加奈「あ、職場で」

出下「なんて呼んでるの？」

加奈「下のお名前で」

吉武「高嗣って？」

加奈「高嗣さんですかね」

出下「ほお」

吉武「ひゅーひゅー」

カメラマンがやってきて、

カメラマン「すみません、みなさん、集まっていただいて、写真とりまーす」

宮里「あ、じゃあ、みんな」

と、新郎新婦と三人で記念撮影をする。

カメラマン「ありがとうございます」

宮里「じゃあ、また後でな」

三島「おう」

続いて、宮里の母親がやってきて、

久美子「いつも高嗣がお世話になっております」

皆、口々に「お世話になってます」。

久美子「今日は存分に楽しんでいってくださいね」

三人「はい」

母親、三人のテーブルを離れる。

そこへ、カメラマンがやってきて、

「お母さん、こっち向いてください」

と、写真を撮る。

○病院にて-----吉武の病室

吉武、病室のベッドの上に座っている。

出下、三島、宮里、やってくる。

出下「おーい」

吉武、呼ばれた方を見て、ぎこちなくうなづく。

出下「お見舞いに来たぞ」

宮里「手術は、無事終わったの？」

吉武、うなづく。

出下「そりゃよかった」

吉武、うなづく。

出下、外を見て、

出下「いい眺めだなあ」

三島「ほんとだ、海が見えるよ」

四人、窓の外の風景を眺める。

出下「いい部屋あててもらったな」

吉武、うなづく。

三島「思ったより、元気そうで、よかったよ」

吉武、うなづく。

出下「俺のこと、わかるか？」

吉武、うなづく。

三島「手術した直後で、ちょっと声が出ないんだよな」

吉武、うなづく。

宮里「ほら、これ、差し入れ」

吉武、うなづく。

宮里「ここに置いておくから」

吉武、うなづく。

吉武、口が少し動くが、うまく言えない（「ありがとう」）。

出下「まあ、でも、無事に終わって、よかったな」

吉武、うなづく。

宮里「これから、ちょっとずつリハビリ？」

吉武、うなづく。

三島「ゆっくりな」

吉武「うん」

三島「会社は休んでるの？」

吉武、首を横にふる。

吉武、何かを口にしようと考えている。

三島「ん？」

吉武、言葉が出てこない。

出下「辞めたのか？」

吉武、二度うなづく。

三島「そうか」

吉武、うなづく。

三島「あ、そういえば、吉武、ザトの子供みた？」

吉武、首を横にふる。

三島「ほら、ザト」

宮里、ガラケーを取り出して、娘の写真を見せる。

吉武、ガラケーを受け取り、写真を見て笑っている。そして、何度もうなづく。

出下「え、ちょっと俺にも見せてよ」

三島「え、イデも見たことなかったの？」

出下「うん」

吉武、出下にディスプレイを見せる。

出下「え、男の子？」

宮里「違うよ、女の子だよ、女の子」

吉武、笑っている。

出下「おい、吉武、笑ってるぞ」

宮里「ほんとだ」

吉武、また、何か言おうとしている。

手を動かしたり、なにかしら手でもどかしそうなジェスチャーを入れるが、分からない。

三島「なんだろう？」

吉武、頭に手をあてて考え込む。

吉武、思いつき、ガラケーのディスプレイを何度も指す。

出下「ああ、あれだ」

宮里「え、なに？」

出下「名前じゃない？」

吉武、何度もうなづく。

宮里「美奈」

吉武、もう一回という仕草をし、すぐにペンで書くような仕草をする。

三島「どっか紙ないかな」

三島、カバンからメモとペンを取り出し、宮里に渡す。

宮里、「美奈」と書き記して、ルビをふりながら

宮里「み・なっていうんだ」

吉武、うなづいている。

出下「へえ」

三島「なんで美奈っていうの？由来とかあるの」

宮里「ああ。母親と妻から一字ずつ取って」

三島「そういうことか」

出下「ふうん」

吉武、笑顔で、ガラケーを丁寧に閉じて、宮里に返す。

吉武、食べる仕草をして、ちょっと考えて、自分の手首を指して「食事の時間であること」

を示す。

三島「そうか、そろそろ食事の時間か」

吉武、うなづく。

宮里「じゃあ、吉武、またな」

吉武、うなづく。

三島「じゃあな」

出下「早く元気になれよ」

吉武、うなづく。

三島「じゃあ」と、手をあげる。

吉武、呼応して、手をあげ返す。

出下「じゃあな」

宮里「バイバイ」

三人、病室を出て、エレベーターに向かって歩いていく。

出下「しかし、なにがあるか分からねえな」

三島「回復するといいけど」

出下「ありゃ、大変だぞ」

三島「うん」

宮里「まあすぐには無理かもしれないけど」

宮里「前の記憶を取り戻せるようにリハビリするって」

三島「うん」

宮里「想像がつかないな」

三島、エレベーターのボタンを押す。
エレベーターの前に待ちながら、三人。

出下「あ、きた」

○宮里家の食卓

晩ごはんを食べている、宮里、久美子、加奈。
美奈は隣の部屋にあるベビーベッドに。

宮里「今日、吉武に会ってきた」
久美子「ああ、高校の同級生の吉武くん。元気だった？」

宮里「いや」
久美子「え、どうしたの？」

加奈「吉武さんって、結婚式にも来てくれてた？」
宮里「うん」

宮里「あの時は、元気だったんだけど」
久美子「どこか悪いの？」

宮里「脳に腫瘍ができたって」
久美子「あら…」
宮里「そう」

宮里「まだ手術して間もないんだけど」
久美子「うん」
宮里「あんまりっていうか、ほとんど喋れなくなってる」
久美子「そう」

宮里「手術はうまくいったみたいだけど、後遺症とかあるみたいで」

宮里「いや、まだそうなるって決まったわけじゃないけど」

皆、ひとしきり、食べ終えているのを見て、

宮里「片付けるよ」

加奈「うん」

宮里と加奈で、キッチンに食べ終えた食器を運ぶ。宮里、皿洗いを始める。

久美子は、美奈の元へ。「いないいないばあ」。

久美子、美奈を抱っこする「よしよしよし」。

美奈をじっと見る、久美子。

○劇中劇

福島駅前。

ピアニストの銅像が、笑顔でピアノを弾いている姿で固まっている。

しばらくして、銅像がおもむろに動き出す。

銅像「私は、駅前に建っている、とあるピアニストの銅像です。私は、駅の前をたくさんの人たちが行き交ってゆくを見てきました。小さな子供をあやしている親子連れ、部活帰りにはしゃいでいる高校生たち、友人と待ち合わせをしている若い大学生たち、別れをなごり惜しんでいる恋人たち、酔っ払って家に帰っていく会社員たち、ベンチで一休みしている老人たち。私はこれからも、多くの人たちを見送っていけるでしょうか？この先もずっと明るい未来はつづくのでしょうか？いつか、ここにいるのが私だけになって、ここを誰も通り過ぎないように何かが起こってしまわないのでしょうか？（時計を見て）おっと、もうこんな時間だ、戻らなくちゃ。私には、いつも皆に時間を知らせるために、ピアノを弾くという役割があるのです。それでは、いつかまた会える日を楽しみに。さようなら、さようなら」

○終演後、劇場の前。

俳優たちと客たちが談笑している。

稽古着に着替えた出下、三島を見つけ、

出下「大ちゃん」

三島「イデ」

三島、出下に向かって、ささやかな拍手をする。

三島「これ」

と、手に持っていた紙袋（差し入れ）を渡す。

出下「ありがとう」

出下「どうもどうも」

三島「いやあ、よかった」

出下「ありがとうございます」

出下「今日は？」

三島「たまたま出張があつて」

出下「そうか、客席に顔が見えてびっくりした」

三島「見えてたんだ」

出下「うん。あ、あれ？なんか見たことある顔だつて」

三島「すごい、ぼれてたか」

出下「うん。でも、本当に、ありがとう」

三島「Facebookで見て」

出下「ああ、そっか、そっか」

三島「それで当日券で入れるかなって思って」

出下「駅から迷わなかった？」

三島「うん、駅からすぐだし」

三島「だけど、東京は人が多いよね」

出下「うん、ほんと」

三島「びっくり」

三島「乗り換えでちょっと迷ってたら、ぎりぎりになって」

出下「ああ」

三島「でも、当日券、取れてよかったよ」

出下「うん、よかった」

三島「あ、そういや、あれ、福島の話？」

出下「そうそう」

三島「そうだよな、やっぱり」

三島「もう五年経つんだよなあ」

出下「そうだよなあ」

出下「吉武の具合は？」

三島「相変わらず」

出下「うん」

三島「まだ回復してないっていうか」

出下「そうか」

三島「それでも、ちょっとずつ」

出下「うん」

三島「家に呼んでさ、ちょっと食事したりは」

出下「うん」

三島「できると思うけど」

出下「うん」

三島「今度、帰ったときに、三人でうちに集まろうか」

出下「そうしよう」

三島「それと、ザトの墓参りも」

出下「うん、そうだな」

三島「うん」

出下「今度の夏かな」

三島「帰ったら、連絡して」

出下「おう」

出下、別のお客さんが待っている気配を感じ、

出下「あ、ごめん」

三島「あ」

出下「じゃあ、また今度」

三島「うん、またな」

出下「おう、ありがとう」

三島、去っていく。

出下、別の客に挨拶をする。

○海辺、晴れた日に。

森山、岩永、遠くから海岸線をゆっくり歩いてくる。

森山「(ハンカチで額の汗をぬぐい) ふう」

岩永「暑いわね」

森山「このあたりじゃない、見覚えがある」

岩永「そうだ、このあたりだった」

森山「なつかしー」

腰を下ろす、二人。

森山「大丈夫？」

岩永「うん」

森山、水筒を取り出して、麦茶を注いで、岩永に渡す。

岩永「ありがとう」

岩永、ひとくち飲み、

岩永「冷たい」

森山「美味しい？」

岩永「うん」

岩永、飲み干して、コップに残ったしずくを振り落とし、コップを返す。

森山、コップに麦茶を注ぎ、自分も飲む。

岩永「暑いわねえ」

森山「ええ」

二人、しばらく海を眺めていて、

森山「あっちが第二原発でしょ？」

岩永「うん」

森山「このあたりかなあ」

岩永「前と、ちょっと変わったのかなあ」

森山「もう、ここにしょつか」

岩永「うん」

ピクニックを始める二人。

サンドイッチやおつまみを広げ、クーラーボックスから缶ビールを取り出す。缶ビールは三つ。

缶ビールを開ける、二人。

二人「かんぱーい」

ごくごく飲む、二人は「くー」などと声をもらす。

森山「うまし」
岩永「最高だね」

森山「久美子にも」
岩永「ああ」

と、岩永、三つ目の缶ビールを開ける。

岩永「私たち、最悪だね、久美子の分、忘れてた」
森山「久美子だし、許してくれるよ」
岩永「そうかな」
森山「ちょっとー、なんで私だけーって」
岩永「許してないじゃん」
森山「はは、いじられキャラっていうか」
岩永「そうそう」
森山「愛すべき人物だった」

森山「ね」
岩永、一口飲んで「うん」
森山「へへ」

森山「よくここ来て、がっこ、サボってたよなあ」
岩永「絹ちゃんだけでしょ」
森山「え、三人で来てたんじゃなかったっけ」
岩永「私たちは、放課後迎えに行く係」
森山「えー？迎えにきてもらってたんだ」
岩永「そうだよ、覚えてないの？」
森山「うーん、あんまり。へへ」
岩永「へへじゃないよ」

岩永「今だったらあれだけど、携帯とかもないからさ、いくつかアテのあるところに」
森山「すまん、すまん」
岩永「たまに家に帰ってたりするから」
森山「ははは」

岩永「いい加減にしろよって、二人で」

森山「ふふふ」

岩永「でも、久美子のほうが心配症だったかなあ」

森山「そう」

岩永「絹ちゃん、誰かにさらわれたのかもとか」

森山「ばかだねえ」

岩永「でも、心配して」

森山「うん、うん」

森山「いいやつだったねえ」

岩永「言わずもがな」

森山「そう、言わずもがな」

森山、再びビールに手をつけ、鼻をすすって涙をごまかす。

岩永も、少しじんわりと、鼻をすする。

森山「え、早苗、泣いてるの？」

岩永「絹ちゃんだって」

森山「泣いてないわよ」

岩永「ほんとに？」

岩永、森山の顔をじっと見つめる。

二人、我慢できなくて、笑う。

森山「久美子がそばにいるみたいに感じるね」

岩永「え、なに言ってるの、久美子、ほら、そこに、いるよ」

森山「え？」

岩永「いるじゃんね、久美子」

岩永「ねえ、久美子、ビールまだある？」

岩永「もうない？じゃあ、これあげようか」

岩永「はい、どうぞ」

岩永「久美子、サンドイッチもあるよ。ほら、これ」

岩永「なーんつつて」

森山「早苗って、からかうのが上手なんだから」

岩永「気でもふれたかと思った？」

岩永、笑いながら少し泣く。

森山、そっと岩永の背中をさする。

しばらくして、

岩永「もう大丈夫」

森山「うん」

二人、体勢を立て直す。

森山、煙草を吸う。

岩永「まだ吸ってるの？」

森山「うん。早苗は？」

岩永「ううん」

森山「煙草、いつやめたの？」

岩永「結婚する前かなあ」

森山「煙草は、やめられないわ」

煙草を吸い終える、森山。

岩永「海の方に行ってみる？」

森山「うん」

飲み食いしていたものを、片付ける。

二人、海の方へ進んでいく。

森山「あ、お花」

と、花を取りに引き返す。

岩永、波のきわに立っている。

遅れて、森山が到着する。

花束の半分を岩永に渡す。

森山、海へそっと投げ入れる。続いて、岩永も投げ入れる。

そして、手をあわせて黙祷する。

しばし、海を眺めている二人。

岩永、森山の両手を取る。

森山「ん？」

岩永「ねえ、こうやって、二人で手をつないで、想像してみない？」

森山「どういうこと？」

岩永「また会えるかもしれないなって、久美子に。タイムマシンじゃないけど、はは」

森山「ふふ、うん」

岩永「会えるじゃないか…。会ってたときの感触なのかもしれないけど」

森山「ちょっとやってみようか」

岩永「うん」

森山、岩永、手をつなぎ、久美子のことを思う。

*チャーホフ『かもめ』（神西清訳）より一部引用しました。